ルネッサンス

1．解剖学と「汝自身を知れ」
（以下は次週にアップします）
2．土星とうつ病（メランコリー）
3．錬金術と人工人体
4．魔女の身体と民衆文化
5．身体の規律と文明化の過程

1．解剖学と「汝自身を知れ」

a．ルネッサンスと古典医学の復興
b．「言葉と物」と解剖学
c．ヴェサリウス『人体構造論』(1543)
d．解剖劇場
e．「汝自身を知れ」

a．ルネッサンスと古典医学の復興

14 世紀のルネッサンスから 16 世紀のルネッサンスへ：ギリシア語の知識
1453 年の東ローマ帝国の攻略と、当地のギリシア語ができる学者たちが西ヨーロッパに亡命すして、ギリシア語の高度な研究が可能になった。

レオニチェーノ
フェラーラ大学の教授で、エラスムスとも交友があった優れた人文学者のニコラウス・レオニチェーノ(Nicolaus Leoniceno, 1428-1524)『医学におけるプリニウスと多数の著者の誤りについて』（1492）、アラビア医学の権威の否定

印刷技術
書写の過程の過ちを排除して同一のコピーを何百部を作ることができる。
1525　ガレノスの著作のギリシア語全集、1526　ヒポクラテス集成の最初のギリシア語版

人文主義医学
語学の習熟、原語によるテキストの校訂、正確なテキストの出版　－　人文主義そのものであった。その一方で、その言葉がさす「事物」は何か、という経験尊重の姿勢もあった。

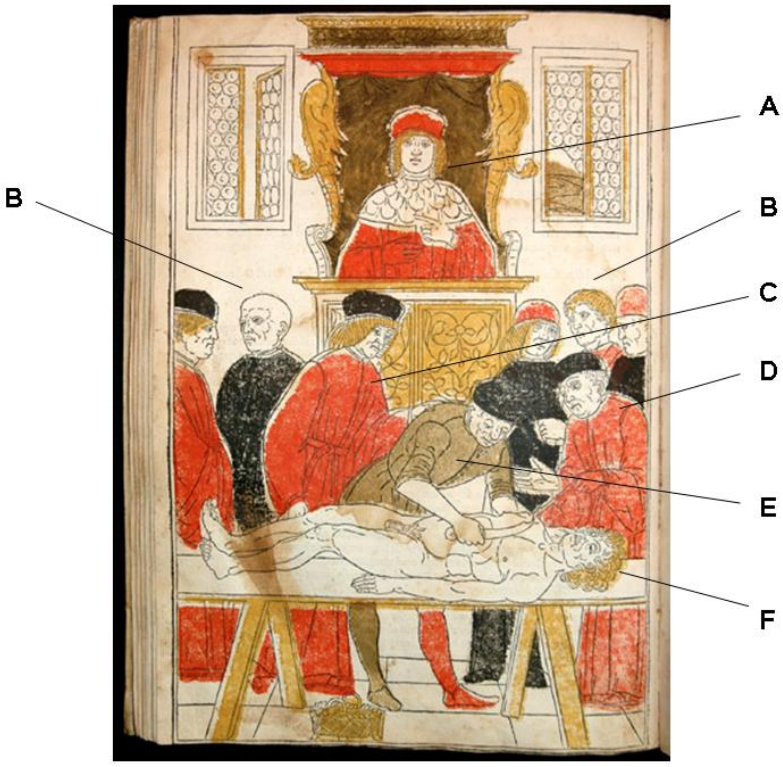
薬草、病気、身体の部位
ピエール・ブリソ (Pierre Brissot, d.1522) がはじめた瀉血をめぐる論争は、瀉血を行う部位について、アヴィセンナの解釈とヒポクラテスやガレノスのギリシア語原典の食い違いを指摘し、後者の正当性を擁護するものであった。
レオニチェーノの影響を直接に受けたフェラーラの医師たちは、ローマ時代のギリシア語の本草書であるディオスコリデスの『本草論』(*Materia Medica*) を発見して編纂して出版したが、その企画は、古代医学の本草書に記された植物を特定するために、ヨーロッパ各地を訪問し、あるいは植物の標本を収集することを伴っていた。

b. 「言葉と物」と解剖学

ボローニャ大学の医学教授であったモンディーノ・デ・リウッツィ (Mondino de Liuzzi, ca.1275-1326) は、1316 年に『解剖学』を著した。ほぼ同時期のモンペリエ大学でも人間の死体解剖が定められ、ヴェニスでは 1368 年に市当局が外科組合と内科医組合に少なくとも年に一回の解剖を行うように定めている。

これらの大学や市当局が公認した解剖講義においては、当局の承認のもと使用が認められた刑死者の死体を解剖に用いられていたが、このルート以外で死体を入手する非公式の解剖も行われていた。これは医学生や医学校の教師たちが闇にまぎれて墓をあばいて死体を盗掘するなどして家に運び込んで行うものであった。すでに 1319 年には、ボローニャ大学の医学生が死体の盗掘のかどで訴えられている。のちに、解剖用の死体をどう確保するかという問題は 18・19 世紀のイギリスやアメリカで大きな問題となるが、この問題はヨーロッパの医学で解剖学が教えられるようになるのとほぼ同時に始まった、解剖学という行為につねに随伴する問題であった。

二つの図版
さまざまな医学テキストを一冊に集めて 1493 年にヴェネティアで出版された『医学選集』(*Fasciculo di medicina*) におさめられたもので、上で触れたモンディーノによる解剖学の章の冒頭に掲げられ、当時の解剖学講義を比較的忠実に描いたもの(上)と、Berengario da Carpi の 1535 年の図版(下)



問題：　それぞれの図像は複数の人物を描いているが、中心になる、最も権威がある人物はだれか、指摘しなさい。

解剖学講義を描いた二枚の図版が、その構図の中心の置き方において大きく異なっていることは、当時の解剖学が二つの焦点を持っていたことを示唆している。一つは文字で書かれて読み上げられる解剖学の書物であり、もう一つは指し示されて目で見られる死体である。この二種類の異質な＜テキスト＞が解剖学という空間に並び立っていた。

言葉と物とメタテキスト

1531 年にその一部がギリシア語からラテン語に訳されたガレノスの『解剖学の手続きについて』という書物が出版。その中で、ガレノスは、人体解剖を行えなかったので、動物（サル）で代用したこと、実際に人体を解剖して確かめることが望ましいとした。　新たに発見されたガレノスの書物(テキスト)は、「硬直した権威への盲従」というイメージをしばしば持たれるガレノス主義を喧伝していたのではなく、人体というもう一つの＜テキスト＞との照合を通じて、それ自身を改訂することを要求するダイナミズムを内に持っていた。死体という＜テキスト＞の権威に基づいて、ガレノスの書物という＜テキスト＞の権威を覆す方向性を示す＜メタテキスト＞が現れたということになる。

c. ヴェサリウス『人体構造論』(1543)

ガレノスに従いながらガレノスを批判して超えていくというプログラムを実現したのが、パドヴァ大学の解剖学の講師であったアンドレアス・ヴェサリウス（Andreas Vesalius, 1514-64）があらわした『人体構造論』である。奇しくも太陽中心説をとなえたコペルニクスの『天球の回転について』と同じ年である 1543 年に出版されたこの書物は、ヨーロッパの近代医学を象徴することになる記念碑的な著作となる。

1538 年にヴェサリウスが出版した『解剖図譜六葉』は、肝臓、血管、生殖器、骨格などを描いたものである。この図譜集の骨格図には、ある骨の名称をラテン語、ギリシア語、アラビア語、ヘブライ語などで特定して記されていることに、ヴェサリウスが受けてきた人文主義と人文主義的な医学の影響がはっきりと認められる。

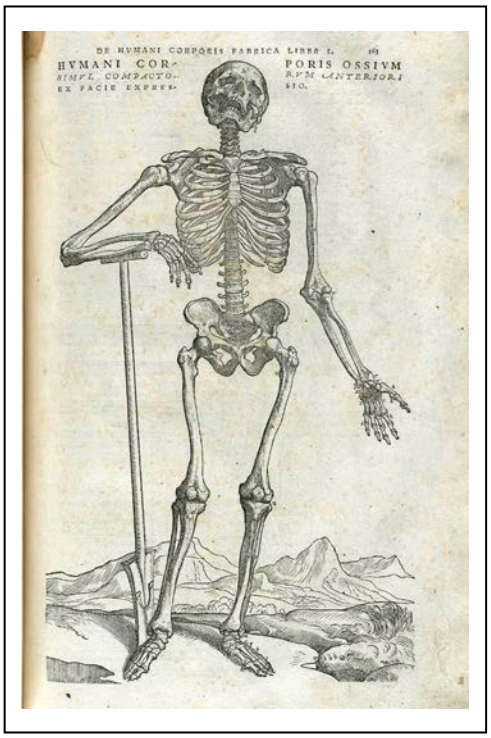
[ヴェサリウスは]、諸君に、脇腹の痛みに対する瀉血について最近医者たちの間で大きな議論が起きているが、この問題について私の理論が正しいことをお見せしよう、そして私が最近出版した書物が正確であり、この身体と対応していることを証明しよう、大静脈 [vene cava check!!] から枝状の血管が出て肋骨をめぐり、胸部全体に栄養を行き届かせている様子を見せよう、と言った。彼は、彼が最近出版した小さな書物と『図譜』で出版した絵を見せて、それを目の前にある死体と較べた。そして、確かに、それらは完全に対応した。私はすぐ側に立っていたので、自分自身の目で見ることができた。これは、昨今の外科医や [ボローニャ大学の教授である] クルティウスの意見とは違うけれども、私はヴェサリウスの小著を読み、脇腹の痛

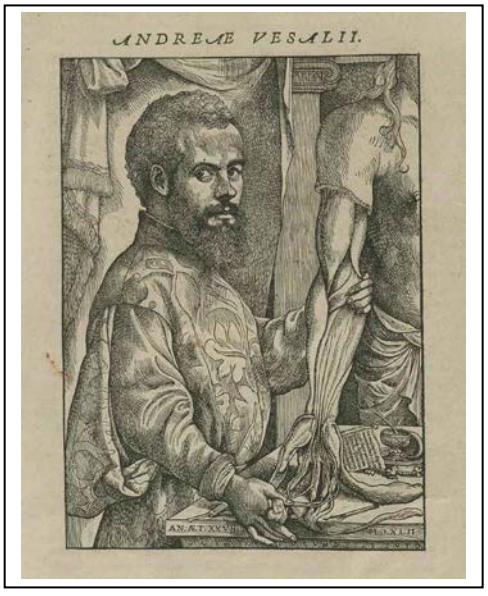
みに対しては、どの静脈を開いて瀉血しなければならないかを理解した。（パドヴァでのヴェサリウスの解剖講義を受けたあるドイツ出身の医学生の日記、1540 年）

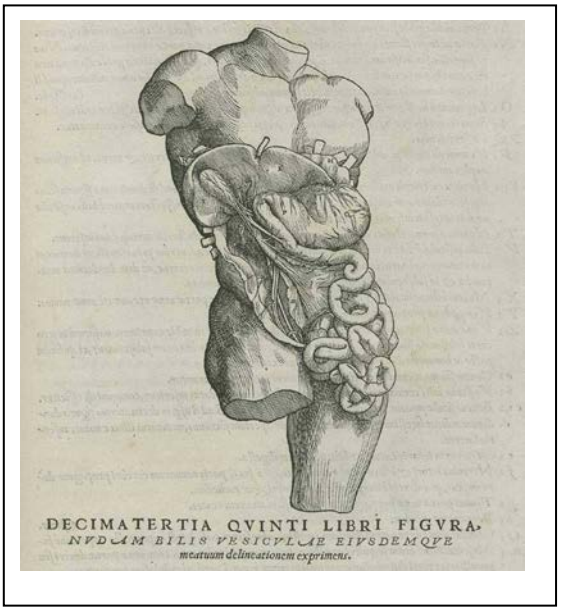
『人体構造論』

『人体構造論』についてはヴェサリウスは多くの図版をプロの芸術家に図版を依頼した。この芸術家は、当代最高の画家のティティアーノのスタジオで仕事をしていた、ヨハン・ステファン・フォン・カルカール [check!!!]に帰されている。この図版の版木をアルプスを越えてバーゼルに運ばせ、同地のギリシア語教授のヨハネス・オプロピウスに図版の取り扱いに関して詳細な指示を与えて出版させたのが 1543 年。フォリオ版で合計 600 ページを超え、200 葉の図版を持つ 7 巻本の巨大な書物は、神聖ローマ皇帝カール五世に献呈され、ほぼ同時に出版されたこの書物の簡易版は皇帝の息子であるスペイン王フェリペ二世に献呈された。

『人体構造論』の扉絵（1543）







『人体構造論』の図版は、芸術上の主題や構図になぞらえて描かれた図譜を多く含んでいるのである。これは、解剖図譜を、実際に死体を解剖する生々しい行為とその文脈から切り離す効果を持った。

d. 解剖劇場

解剖学講義の劇場化

パドヴァのファブリツィウス（Fabricius ab Aquapendente, 1533-1619）

常設劇場は、仮設された教室に学生たちがひしめいて死体に密着してそれを経験する場ではなくなり、代々の解剖学講師の肖像や寓意的な意味を持つ絵画が飾られて彫刻が施された壮麗な空間となった。着席の位置は厳密に定められ、前列には大学の教授、ヴェニスから招待された名士や司教たちが着席した。講義の最初にこれらの名士が入場するとともに楽士が音楽を演奏し、切り取られて標本化された器官が招待者たちに回覧されるなか、教授のファブリツィウスは、その劇場の主役として、その器官が持つ自然哲学的な意味を語った。

イタリアとほぼ同時期に、オランダでも常設の解剖劇場が続々と設置された。ライデンは 1597 年、デルフトは 1614 年、アムステルダムは 1619 年に常設の解剖劇場を持つことになる。

Pl. 8 an anatomy at the Leiden anatomy-theatre, anonymous engraving, 1609, after a drawing by J. C. van 't Woudt (woudanus). *The praelector has a book open in front of him (pp. 5–6). The spectators wear hats (pp. 29–30). Skeletons hold pessimistic inscriptions (p. 96).*

死を想え

解剖学は、絵画の主題と密接な影響を持った。その一つが、当時のオランダ絵画で流行していたヴァニタス (vanitas) と総称される主題である。人生のはかなさと死の確実性を描き、「死を想え」(memento mori)という教訓を説くヴァニタスの主題は、解剖学の表象に深い影響を与えた。先に掲げたライデンの解剖劇場を描いた版画の骸骨の一つは、「男なんてシャボン玉」(homo bulla) というヴァニタスのモットーが書かれた旗を掲げている。

レンブラント『テュルプ博士の解剖学講義』

解剖学講義が絵画と重なるとともに、解剖講義に出席した人々は、骨格や解剖中の死体を中心にしてグループ・ポートレートを描かせ、当時のオランダの繁栄と背中合わせの現世のはかなさを深く想う流行の身振りに参加した。これらの絵画の頂点にあるのが、レンブラントが 1632 年に描いた『ニコラース・テュルプ博士の解剖学講義』という有名な作品である。

ここで描かれている解剖は、単なる医学教育の場ではなく、当時の社会において広がりをもって共有されていた宗教的感動の機会であった。

e. 「汝自身を知れ」

「自己を知る」行為のメタファーとしての解剖

自分自身をよく知るものは、全てのことを知るのである。自分自身を知れば、まず神を知ることになるであろう。なぜなら、人間は神の姿に似せて創られており、神学者たちには「神の王国の神殿」と言われているからである。第二に、天使を知ることになるであろう。なぜなら、人間は天使と同じように知性が備わっているからである。そして、動物を知ることになるであろう。なぜなら、人間には、動物と同じ機能や感覚や欲求が備わっているからである。(イギリスの解剖学者、Helkiah Crooke, 1615)

『聖トマスの懐疑』（カラヴァッジオ、1610）自分の体の内部をあらわにするキリスト